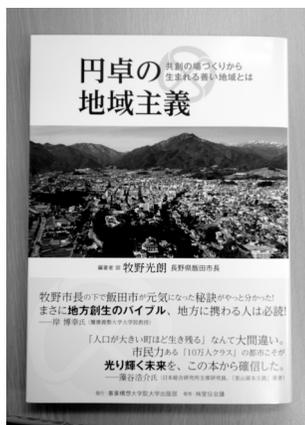


『円卓の地域主義

地方を消滅させない実践書！』

牧野光朗 編著

事業構想大学院大学出版部 (定価 1,800円+税)
(A5、256頁、2016.1)

円卓では、上座という意識はなく、誰が偉いということでもない、貴賤の差別なくみんなが対等に話し合いをする (p.158)。

本書には、2004年から飯田市長に就いた牧野光朗氏が、かつて銀行員として、駐在先のドイツで、そして市長就任以降、様々な円卓で学び、それを糧に実践に取り組んできた足跡、それに現在の飯田市での取組みと今後の抱負がまとめられている。

牧野氏が銀行員時代に駐在した大分と富山は、いずれも新産業都市、テクノポリス、一村一品運動、産業クラスターといった様々な種類の地域政策の舞台となってきた都市だ。またドイツは日本と似た産業構造を持ちながら、大きく異なるライフスタイル、市民意識、そして分散型の都市構造を持ち、ドイツ人はそれらを誇りにしている。「決定的影響を与えた人々」

(p.26～)との出会いは、こうした様々な都市に牧野氏が関わる過程で、多くの円卓での出会いと学びから得た、貴重な財産だったのだろうと感じられる。

現在の飯田型まちづくりの実践を、大学生の目からみた第3章は、飯田市の取組みをいささか称え過ぎているように読者には感じるかもしれない。しかし、日本の多くの若者にとって無名で、取り立てて有名な観光地もない飯田市で、毎年、千人近い大学生がフィールドワークに訪れ、地域のまちづくりを学んでいる。何の変哲もない、衰退しつつある田舎町だと思って飯田に入ってきた彼らが目にする、太陽光発電、人形劇のまちづくり、航空宇宙産業クラスター、公民館活動…、数え上げればきりが無い数々のユニークな取組みを前にして抱く感想は、おそらくこの大学生と同じものになっているはずだ。

若者の心をつつ様々な取組みは、一人だけからは生まれにくい。最後の章となる鼎談地元企業家・有識者との意見交換でも、円卓の重要性、そして地域に生きる人材には重層的な人間関係 (p.223) が必要とされることが、度々強調されている。様々な人間関係が地域の中で共有される (p.214) には、匿名性の高い数百万人の大都市よりも、10～20万人くらいの都市がちょうどよいのではないか。飯田市、そして下條村、泰阜村、大鹿村など、特徴的な取組みを行う周辺の町村も含めた下伊那・南信州のまちづくりをみると、そう思わずにはいられない。

今後の飯田市は、東京・名古屋と結ぶリニア中央新幹線の開業、浜松など太平洋側の都市と接続する三遠南信自動車道の全面開通といった大きな動きを見据えながら、より幅広い「円卓の地域主義」を深めなければならない立場にある。今後、どのような形でまちづくりが展開するのか、楽しみだ。

(評者：瀬田史彦／東京大学大学院准教授)